

# 哲學研究

第百九十八號

第十七卷  
第九號

## 自覺 綜合 自然 (完)

下 程 勇 吉

### 一四、自覺の同一性と直觀の綜合的統一

其自身 *Sein* の裡に *Dasein* を含む *Cogito, ergo sum* は完結的明證性を有するも、それは「外的多様と結合してのみ働くものである。それと共に「外的」多様の印象は自らに於て自同化し得ないものである。故に多様と結合する *coincido* の自同性の明證意識は多様を反省して意味を成立せしめる不可缺的なる契機をなす。しかし時間の立場に於て成立する意味は直觀に依る充實が必然的でなく偶然的である。つねに充されて眞の自同性を有する意味なるものは永遠の立場における唯一の自我即ち先驗統覺に依つて成立すると云はねばならぬ。永遠の立場より論理化されてあらゆる時間系列を貫いて充實を見出すものこそ客觀的認識像であり或ひは「ロゴス」であ

る。永劫の立場より論理化を行ひ隨時隨所に充實を見出すことが先驗的統覺の機能であるとすれば、其の思惟が直ちに内容を生産する知的直觀と先驗的統覺は其の機能を一にするのであるか。永劫の立場から觀じられた意味は完成せる不動の意味である。かゝる意味を生産するものは正しく知的直觀又は直觀的悟性ではないか。併し我々はかゝる唯一不動にして完成せる客觀的認識を有してゐるのではない。現實に我々が有してゐるものは、絶えざる發展と止揚とをその本質的性格とする學的認識である。それはたえざる肯定と肯定との間に統一を求めて發展する動的なる認識像である。かゝる認識形像は決して永劫の相より觀られたる唯一不動にして絶對なる「神の言葉」ではあり得ない。

不斷の發展に生きる學的意識を可能にする先驗統覺は一舉に永遠の眞理に參する神祕的直觀と機能を一にしない。それは直觀内容を生産する思惟でなく、却つて直觀を基底とする形式的なる思惟である。現實と可能との一致の體驗を與へるものとして自覺は明證性を有してゐるが、かゝる明證性は知覺質料よりの疎遠又は抽象を代償として、麻痺得られる形式的高次性である。かゝる形式的高次性の故に、統覺が質料的内容に再び還りて住するの道を捨離するとき、形式は内容を外から包攝

するものとなる。形式が外から内容に對して暴力的に臨む主觀的必然性であり超越的當爲であるとき、一切は主觀的形式の必然性の名のもとに眞理性を借し得るであらう。單なる主觀的思惟形式は眞理の充實性と虚構の架空性との何れにも離轉し得るものである、この事は良心と云ふ主觀的規定が其の形式的主觀性の故に抽象的義務一般として善惡の何れにも離り得るに似てゐる。その時、認識の規範を標榜とする先驗統覺は却つて認識の没規範性と無政府状態に轉化する危険性を孕んで來るであらう。

先驗統覺は思惟内容を生産する神的悟性でもなければ外より暴力的に内容に臨む專制君主でもない。それは飽迄形式的なる規範性をその生命としてゐるが、其の規範性の現實的妥當は形式一般としての統覺自身より證示され得ない。却つて學的認識像の現實的成立を認識根據として反省を進める所の、ロゴスの淵源探求の主觀化作用に於て、學的認識成立に必須なる構造として先驗統覺の規範性が理解されるのである。學的認識こそ統覺の先天的綜合性を映する鏡である。鏡に於ける像を通してのみ自己の顔が見られる如く、先驗的なる主觀の規範的性格は客觀的なる認識に則してのみ主觀化的に反省されるのである。しからば客觀的認識の成立に

は如何なる構造が要求されるであらうか。

客觀的なる學的認識が價值的に眞理性を有するものなる限り、その絶えざる發展にも拘らず一の段階に於ては其れは一義的に眞を示すものである、その限り、それは眞僞の何れにも翻轉し得るものではない。眞僞の何れにも轉じ得る主觀の形式的自由に確固たる足場と制限を與へて一義的なる眞理性を可能ならしめるには、無限なる主觀の形式が專制君主として内容に外から臨む超越的當爲でなくて、根源的に内容と肉親的血縁性を有すると共に其を超える無限なる自由に依つて内容に於て生き、内容を内から生かして自己の表現と化する全體の圓環運動過程が要求される。無限に自由なる自我が自己の根元的出發點たる内容の特殊性を超えて、其の可能的無限性に對する内容の不整合性を克服する長き戰に於て次第に視野と充實を獲得しつゝ、自己を現實的無限性に具體化し、再び内容に還り特殊を無限の自己限定として自覺する全體の充實性に達する時、有限にして特殊なる内容は無限なる自我の云はゞ體として表現性の性格を帯びて來る。特殊的内容より出發する無限自由なる根源的自我が自己の心を分ちて物象に浸透して憩ふとき、形式と内容との矛盾の運動過程に於て一の充實態としての内容形式の統一が客觀的認識の姿に於て現れる。

客觀的認識の成立は、かくて根源的自我が素性の上から質料的内容と肉身の關係を有すると共にその無限性を以つて有限なる規定に憩ふ所の形式内容の十全なる一如性を要求する。

知的直觀を終始一貫して否定するカントは同時に先驗統覺と質料との血縁的不可分的關係を極力説いてゐる。「自覺統覺は自我の單純なる表象である。その表象のみに依りて主觀の多樣が自己活動的に與へられるならば、内部直觀は知性的となるであらう。人間に於ては此の意識は主觀に於て前以て與へられたる多樣の内部知覺が必要である。」<sup>(1)</sup> 思惟が直ちに内容を生産しあらゆる意識内容が直ちに永遠そのものの表現として圓滿具足するとき、自我は神である。併し自覺又は先驗統覺は他迄「思惟」であり形式的である。それはその思惟によりて多樣を生産し得ざるのみならず、却つて感性的多樣にその基底を持つてゐる。「此の統覺の必然的統一の根本原則は其自ら自同的であり、従つて分析的命題であるが、それは一の直觀に於て與へられた多樣の綜合が必然的であることを示してゐる、その多樣の綜合なしには自意識の汎通的自同性は思惟され得ない。何となれば單純なる表象としての自我に依つては何等の多樣は與へられない。その表象とは異なる直觀に於てのみ多樣は與へ

られ一の意識に於ける結合に依つてのみ思惟され得るのである。」<sup>29)</sup>

かくて自己意識は分析的ではなく綜合的に成立する。従つて其の思惟は内容を生産することは不可能である、却つて自覺は直觀に基底をもつてゐる。のみならずカントは一步すゝめて直觀の綜合こそ自覺の根據であるとすら説いてゐる。即ち「先天的に與へられたものとして、直觀の多様の綜合的統一こそは、あらゆる私の限定された思惟に先天的に先行するところの統覺そのものの同一性の根據である。」<sup>30)</sup>かく云ふ時あらゆる認識の原理をなす統覺の自同性自體が直觀自身の綜合的統一に依存することとなる。従つて客觀的表象結合の現象に於ける根據即ち現象の親和性」は統覺に依存するのでなく客觀或は直觀内容自體に存するものとなるであらう。しかく我々は斷じ得るのであらうか。

(1) Kant: K. d. r. V. B. S. 68.

(2) Kant: K. d. r. V. B. S. 135.

(3) Kant: K. d. r. V. B. S. 134.

## 一五、「統一」の在り方

さきに我々は即自的に存在することなくしては志向的反省は直観に依る必然的充實を實現し得ぬことを見たのであるが、感性知覺にあらはれる現象と構想力に依る再生表象との自同性を統覺に於いて再認的にあらはして概念性に達し得るためには、直観は分散的なる多様でなくて統一を有するものでなくてはならぬ。全然箇々にして統一なきものを綜合して「絶對的統一」となすことは不可能であるからである。しかし統一と結合を完き意味に於て含むものは如何なるものであるか、統一と結合をふくむ現象とは如何なるものであるか。「現象の親和性」を直観自身が有するとせば、直観又は直接所與の世界は主觀に對して如何なる關係をもつて臨むであらうか。統一的にして完結性を有する所與に對しては、認識する主觀はかゝる所與の映像をうつし取ることを出でないであらう。かゝる所與は超越的實在と相去ることと遠くないであらう、かゝるものに對しては如何にしてそれは主觀とのかゝりをもつかゝ問はれねばならない。故にカントは直観の先天的綜合が自覺の自同性の根據をなすと云ふ言葉について次の如く云ふのである。「併し結合は對象の中には存しない、結合は知覺に依つて對象から採られ、それに依つて始めて悟性の中に受け入れられると云ふやうなものではない。」現實の現象は特殊的偶然的なる内容的規

定性を脱し得ない。(B八)

併し現象が單に分散多様として全然結合と統一を有せぬとき概念に於ける再認は不可能となり認識は成立しない。故に現象又は所謂多様は單に分散的多様に盡きない、それは單に直觀形式を含むのみで止まることはできない、即ち何等かの意味で統一を含んでゐなくてはならぬ。時間及び空間の表象は直觀形式としてのみでなく、直觀そのものとして、それに於ける此の多様の統一と云ふ限定を伴なつて先天的に表象されてゐる。<sup>3)</sup>即ち現象は「統一」を含まぬ直觀形式に於て成立するのでなく、「表象の統一を與へる形式的直觀」に於て具體的には成立するのである。かゝる形式的直觀に於て現象は全體的に與へられ、或意味に於て「統一性」を有するが故に、現象と再現との同一性の意識に於て再認的に概念的認識が成立するのである。根源的現象はかゝる全體性を背景として成立し、唯一なる同一性意識としての自我に媒介されて、自我の同一性及び明證性を與へられるとき、現象は概念的認識として必然的に充實される意味に發展する。

斯くて自我の思惟のみに依りては生産されざる直觀の所與多様は何等かの意味で「統一」を持つてゐる。その統一は現象そのものもつてゐると云へぬ限り、現象そ



のもののうちにあることはできない。併し現象の外にありて外より統一が現象に附け加はると云ふ時、明證的認識は成立しない。其の限り「統一」は現象のうちにあることも出来ぬが外にあることもできぬ。自己のうちにある融合性又自己の外にある疎外性の何れに於いても統一と現象とは相交渉しない。かくて其の交渉の仕方はうちにして外であり、外にして内にある共にと云ふ仕方に他ならぬ。「外的或は內的なる多様の綜合の統一」は、従つてまた空間又は時間に於て限定的に表象されるものがすべて適合しなくてはならぬ結合は、先天的にあらゆる覺知の綜合の制約として既に此の直觀と共に、そのうちにではなく、同時に與へられてゐる。(我々は上の文に於て「此」と書替へることが文脈上可能であると思ふ。)

直觀又は現象はかゝる共にと云ふ仕方に於て統一と結合との可能を含む地盤に於て全體的に與へられてゐる。カントは統一及び結合が直觀に存するものでなく悟性に屬することを説く精神を以て「第一批判」を一貫してゐる、形式的直觀は客觀的統一そのものを含んでゐるものではないが、展開さるべき後者の地盤である。先驗的自我はかゝる地盤を基底とすると共に、其を超えて自己内完結的明證的同一性を宿して、地盤たる現象に對して高次の獨立性を持つてゐる。「自己同一性の根源的に

して必然的なる意識を永遠の現在に於て證示する自我は、永遠の代表として、時間的にして特殊的なる現象の多様に臨むのである。こゝに自我は認識主觀として規範性を有つてゐる。其の同一性と明證性に依つて自我は意味或は認識を構成する、即ち、自我は質的多様に入しその同一性を「投入」して客觀的認識を可能にする。斯くて自我は所與直觀に基底を有すると共にそれを超える同一者としての高次の獨立性を維持しつゝ、其の基底に還りて生きるが故に時としては地盤としての所與直觀の偶然的結合を訂正して新たな客觀的統一を賦與すると共に、時として現象と再現象との自同的意識に於いて地盤の含む直接なる綜合を高次なる立場において裏書きもする、かゝる構成と再認との二つの道を通じて自我は現象を認識に導く。

即ち自我は自然に法則を云はゞ賦與する(*sei ich sam zuschreiben*)するのである。自我は現象又は直觀と共に與へられる對象性を展開する思惟である、かゝる地盤に根を卸すが故に思惟の法則は直ちに對象の法則となるのである。自我は對象認識の必須なる道程である。それに對して「現象の自然は、人の言葉」又は意味一般の根源的地盤であり不盡の母胎である。而して自然は「人の言葉」に翻譯せられることを要求してゐる。時間に生きる人の言葉は時間の底を包む云はゞ永遠の立場から論理化

されて、常に充實されつゝも自己を止揚する學的認識の地盤となる。「現象の自然」が時間的個人的自我に於て成立するならば、法則の自然は普遍的超個人的なる唯一の先驗統覺に依りて成立する。かゝる「人の言葉」と學的認識との中間に時間と永遠とをつらねる自我即ち永遠の現在に生きる自覺が同一性と明證性とを以つて認識を可能にする。

自然又は質料的多様と血縁關係を有すると共に、それ自身同一性と明證性とを具備する高次性に依りて、統覺は質料の多様そのものを貫きて生き、その自己生命たる普遍性の膏血を分ちて、質料の特殊性を永劫の光の下に照し出すのである。特殊のなる内容を基底として生きる高次の自覺が再び自己の根柢に還る時、内容の世界は特殊者を貫いて普遍者が生きる王國と化する。それに依りて特殊者は永劫の光を宿して内より輝くと共に、普遍者はその勞苦に充ちたる巡歴に於いて眞の充實性を深き陰影に於いて味得する。併し自我がかゝる認識の巡歴の路上に於いて達し得るものは、永遠にして唯一不動の認識又は「神の言葉」それ自體ではない。自覺がその基底として有する根本現象が絶えず進轉し變移する限り、それとの血縁關係に依りてのみ特殊なる内容的質料に浸透して生きる自覺は、亦やがては止揚さるべき暫定

的なる認識を生産し得るに過ぎない。自覺そのものの可能條件なる質料の特殊性は、自覺の發展並びにその活動の成果そのものをも制約する。その限り偶然的者と共に働きてそれを普遍化する自覺は「己ぶべきものを生む運命をもつてゐる。

併しこのことは悲しむべきことであらうか。所詮一定のエンテレヒーを自然よりうけて働く自覺の生むものは相對的である。とは云へ眞に有限と相對に徹し抜いて特殊なる内容を形式の無限性にて貫き盡し自覺の普遍性の魂を彫り込むことこそ眞の永遠と絶對とに參する所以ではないであらうか。鍛られざる若き熱情が一向きに絶對化を翹望することに於いて、却つてその空虚さと無力とを曝露するに對し、眞に充實する精神の營爲は特殊に活動を集中する「諦らめの人」(die Tillsagenden)に見られる如く、内容と形式との内面的なる統一と融和とは却つて特殊と有限とに徹する無限の自覺に於いて可能である。かゝる批判的なる精神又は諦らめの心に於いて、普遍は特殊を通じて自己を表現し、特殊は自己の有限性を超えて永遠の生命に參するのである。

あらゆる特殊者に自在に出入し有限者を生かす自覺はその成果に於いてこそ、尙止揚さるべき或物であるが、その作用性と精神性とに於いては無限である。それこ

そ、人間そのものに宿る天地の精髓である。其は「區別なきもの」の區別として生きる普遍的者である。しかしかゝる先驗的自覺はその普遍性と明證性との高次性にも拘らず其の主觀的形式性の故に眞偽の何れにも轉じ得る可能をもつてゐる。かゝる自覺の作用の活動に内容を與へ架空の虚構性より救ふて實を結ばしめるものは、根源的内容であつた(B, 一四)。併しかゝる内容は決して特殊の偶然的規定性に於ける質料ではなくて、一切を包む根源的全體としての「自然」である。自覺にエンテレヒを與へ且つそれに軌道を示すものは可能的なる根本現象の全體としての「自然」である。我々は自然に於いて時々刻々の現象を貫く全體的者を求めて今一度知覺の分析に還るであらう。

(註) (1) Kant: K. d. r. V. B. S. 1:4.

(2) Kant: op. cit. B. S. 160.

(3) Kant: op. cit. B. S. 161.

(4) 此の點に於て認識は *abstrahieren* でなくて *unhiden* であると云ふ立場に終始するリツケルトのカント解釋よりかコーエンのそれに一層深き意味が見出されるであらう。

## 一六、全體的根源としての自然

自然と自我と認識、現象の自然と純粹統覺と法則の自然、内外一如の根本現象と根源的自覺と永遠の譬喩（グライヒニス）としての「ロゴス」、此の三者は人間的存在の思惟的方面を形成する三位一體である。自然と認識とは自我を介して連るが、それは自我の相反する方向の兩極における二つの無限として其自身にては何等の合一點を見出さぬものであらうか。

自然又は現象は絶えず流動し發展して絶えず新たなる面目を示してゐる。絶えず *absoluten* し流動する相は無限の豊富さに彩られてゐる、その各々の相は「今此處」と云ふ規定において限りなき變化を見せてゐる、しかし知覺はかゝる *hic et nunc* における特殊相の背後につねに「存在」を宿してゐる、物は今此處にあるのである。即ち知覺又は現象はたえざる生々潑刺の相と共に不變恒常の姿を示してゐる。かゝる個物に對する知覺のふくむ存在に對する信仰的意識は盲目的であると云はれる。しかも「今此處にあり」と云ふことは全體的背景のもとにのみ云はれ得るのである。今此處にありと云ふ性格或は *Totalkation* をもつて成立する知覺は「今此處に」と云ふ特殊相を「あり」と云ふ全體の系列においてその位置を指定するものであると云ひ得ないであらうか。「今此處に」と云ふ規定性を有する知覺現象の相はたえず更まり移

り行くが、それは各々皆あり」と云ふ同一なる性格をその背後に宿してゐる。もとより「今此處に」現れる相と「あり」の存在との間の内屬的歸屬關係は自覺されてゐない、又は現れ出づる相がその背後の存在の必然的表現なることが反省されてはゐない。唯盲目的にひたすらにあらゆる知覺の相は物の存在を指示してゐる。併しひたすらなる熱情が自己に執し徹することによりてそれ自身盲目でありながら却つて自己を止揚し、全體を實現する理性の指示に仕へる如く、盲目的に此の一點において存在をたえず示す知覺現象はかへつて光の原理たる自覺の基底をなし自覺的統一の自己實現としての認識に聲なき言葉にて其の方向を語るものではあるまいか。永久の現在に立つ持續的なる我は「物」によりて自己の體を與へられるのである。「今此處に」とは「現在」であり、「あり」は「永遠」をあらはす、「永久の現在」とは「今此處にある物」とられた「形」(Form)である、前者は後者より「質料無し」(ohne Materie)「形」のみをとれるものとアリストテレス的に云ひ得ないであらうか。かくて自我は知覺の中に深く根を卸してゐるが故に認識を知覺の中より汲出し得ると云へるであらう。

知覺はかくて「今此處に」の時間と空間の特殊性の裏に「あり」と云ふ全體的にして一切の可能的者を包む永遠又は絶對の世界を未知の底としてもつてゐる。一切の「根

本現象はかゝる未知の底の上において、絶えず流れる空間において限りなき姿を見せてゐる。かゝる流轉性に於て全貌を示す一切の根本現象其物の刻々新たな創造には均しく全體的存在の統一が憩ふてゐる。今此處にあるものは皆それ自體のあるべき境において流れ動く。晴陰乾濕の日日を好日に翻し得る精神の光の下に、嘗つて迷執として厭離せられた、此の事物への關心が無限の生命に於いて甦る如く、外部知覺の個體的存在への盲目的志向は、自我の綜合的統一に指標を與へる全體的地盤を指示するものとして反省される。デカルトの *Scioin* と *Descin* との區別から出發した我々は明證性を求めてこゝにその初めに棄て去つた「存在」をかへつて *Scioin* の明證性の根源として見出すにいたつたとは云へぬであらうか。

もとより認識は他の文化財と共に精神の表現として、形式と内容、無限と有限、普遍と特殊の内面的統一である、その限りそれはその深さに於いて日月山川の所謂「自然」の大と雖も比肩を許されぬ精神性を宿してゐると云はれやう。併し人々が唯「驚嘆と崇敬」を以つてエンテレヒーを汲むの外なき「自然」又は根本現象に於いて、認識は其の根源を有してゐる。實に「自然」はその創造を無から迸出させる、そして創造されたものに、何處から來たか、又何處へ行くかを語らない、被創造者は唯走ればよいの



である。自然がその軌道を知つてゐる。又「多様な生れ出たものの系列に於いて人間は云はゞ神が自然と交はした最初の會話である。」此等のゲイテの言葉は我々の結論に近いものを意味するであらう、一切の根元としての自然の深底に還り盡せるとき、境地を神の世界とすれば、人間こそは自然から出て神に歸せんとする道程にロゴスを見出す精神であらうから。(七・四・二七)

附記 私の個人的事情から一言することが許されるならば本編は四月十一日の朝地に還つた母の靈に捧げられるものである。